

カトリックの正史には記録のない 中世の女教皇ヨハンナの伝説を検証する

語り手の意識を映し出し、生きた記憶となった伝承を歴史的に考える面白さ

山辺規子

マックス・ケルナー／クラウス・ヘルバース 著
藤崎衛／エリック・シッケタンツ 訳

▶女教皇ヨハンナ

伝説の伝記(バイオグラフィ)
9・8刊 四六判240頁 本体3000円
三元社



実在したのかどうかかわからない、いたとしても伝説に伝えられていることが本当かどうかはわからないが、長く語り継がれている伝説的な人物は各地にいる。中世ヨーロッパでいえば、おそらくいちばん有名なのはイギリスのロビン・フッドであろう。シャーウッドの森に住み、庶民の味方であるアウトロー、ロビンは正義のヒーローであり、人気があることもうなずける。

一方、本書で取り上げられる女教皇ヨハンナは、そう簡単に位置づけることができない存在である。なんといっても、現在でもカトリックの正式教義では司祭にさえなれない女性が、学問を身につけて中世ヨーロッパの最高権威とされるローマ教皇になってしま、一定期間その地位にあった。そして、女であることが暴露されるのが、多くの人々がみている行列巡行のさなかに出産をしてしまったというのだから。本来あってはならないことが重なっているために、当然正史と呼ばれるようなところに記録はないが、この女教皇を恥すべきこととして秘匿されただけで実在したと考える人もいれば、作り話とする人もいる。それでも、この伝説の女教皇が長い間に繰り返し取り上げられたことはまちがいない。このような伝説が語り継がれることを検証しようとしたのが本書である。

歴史家である著者は、この伝説を検証するかぎり、実在したとは言えないとする。古い史料ではもともと女教皇がいたとされる時期についても一致をみているわけでもなく、どのような人物かも不明である。そして何よりもはっきりとした史料として利用できるものが、女教皇の時代からほんのり下って13世紀後半のものであり、その存在を裏証できるとはいえないからである。しかし、実在しているという言いまわし、さまざまな時代において、いかに言及されるかによって女教皇は、語り手の意識を映し出す。その姿の存在は言及されることによって、伝承は生きた記憶となる。

そこで、著者は、歴史の中に語られてきた事実注目して、ヨハンナがいたとされる最も古い時代である9世紀から現代まで、実証的に史料検証をおこなないながら、ヨハンナ像を示していく。特にヨハンナがあらわにはならない存在であるがゆえに、その記述は、時の教皇に対する批判、プロテストアントによるカトリックへの批判、腐敗した一般的な教会体制への批判、男性であればできることを女性でもできるのだというフェミニズム的立場からの社会批判に結びつく。あるいは、学問ができれば不可能も可能になるという期待を読み取ることもできるし、反キリストの象徴ともなるし、悪魔と結びつける考えも当然出てくる。そこに注目した本書が翻訳されることになったのも、歴史的に伝承を考える面白さを示しているからにはかならない。

本書の原書が世に出ることになり、さらに翻訳されるきっかけとなったのは、アメリカ人作家ドナ・W・クロスの小説(邦訳『女教皇ヨハンナ』上・下)『草思社、2005年)とその映画化がドイツで大ヒットしたことにある。その成功によって、この小説が語るヨハンナ像が今後ヨハンナの「実像」として信じられる可能性があるようである。

この小説の中のヨハンナは、9世紀マインツ出身で、イングランド人の父を持つヨハネス・アングリクスである。もしこのとおりであるならば、アルプス以北出身の最初の教皇ではないかと思われる。しかも、ヨハンナは情け深く、キリスト教一般知識を持つことはもちろん、ギリシア語も理解し名医でもある。伝承ではアテネで勉強したとされるが、そこは描かれていない。ヨハンナを妊娠させるのは、かつて彼女を苦境から救った伯であり、その関係はまさに至高の愛と呼ぶことができるように描かれる。とすれば、自分たちの地域出身の最高知識人で純愛の持ち主が、さまざまな苦難を乗り越え、混乱したローマで最高権威に選出されるまでになったとすれば、ドイツ人や英米の人々が、この作品を大歓迎したのもうなずける。ただし、ここには、ヨハンナに関する史料の記述にはなかった要素も付け加わっている。つまり、このように「実像」が変わる可能性を目的にしているといえよう。

本書は、教皇の歴史、とりわけ中世前期の教皇の歴史にあまりなじみがない日本の読者には少々難しいかもしれない。しかし、このような読者のために、訳者によって重要な史料の翻訳、史料一覧がつけられている。さまざまな立場による伝承の継受を通じて、歴史的に伝説、伝承を考える好例として、じっくり読んでもらいたい。

(奈良女子大学教授)